

【1日目 宮城県】

■松島

東北支援切符を握りしめ、仙台で降りてみた。さて、ここからどうしよう、と一瞬迷ったが、沿岸部を走る仙石線に乗って松島まで行ってみる事にした。電車に乗るまでは、仙石線は現在石巻まで直通運転はしていないので、1度仙台に戻って石巻へ行こう、とぼんやり考えていたが、社内放送を聞いていると松島海岸から代行バスが出ているようだ。なるほど、それなら電車と代行バスを使って石巻まで行く事ができる。ちなみに、直接石巻を目指すなら仙台から直通バスが1時間に2本程出ている。

車窓の眺めは3月に大変な災害があった事は感じられないような、平凡な眺めが続いている。雨が降っているので、暗く淋しい風景だが、晴れていたら、どうだろう？平凡な都市郊外の住宅地にしか見えない。それこそ、震災があった事などわからないのではないか。

電車は高城町まで通じているが、代行バスは、一つ手前の松島海岸から出ている。風光明媚な観光地なのだろうけれど、雨降りの冬近い日の駅前は何とも淋しい風景だ。代行バスが出るまで40分程時間があるので、食事をする事にした。食事のできる店は4軒程。そのうち2軒は取れたての牡蠣を焼いて食べるのが売りのようで、飾り気の無い駅前食堂の方はビール片手の男性で賑わっている。もう1軒店は都会風なお洒落な店構えで、値段も都会風。ちょっと高いなあって思った時、お店の女性にいらっしやい！！と声をかけられ、何となく入る事となってしまった。ボランティアのあてがある訳でもない私は、現地でお金を使う事が取り合えずの支援だ、と思い直し、入店。お勧め、カキのひつまぶし、を注文した。本来なら1杯飲みながらとなるのだが、何となく不謹慎な気がして、自粛。

お店は若い女性2人で切り盛りしている。ふと目を上げると、背丈の辺りに横線が引かれ、水がここまできました、との表示がある。その表示をきっかけに、お店の女性と話が始めた。最初にカウンターの高さまで水が来ていたが、徐々に、水が上がって壁に書かれた線の位置まで水につかっしまい、営業ができなくなって、店が再開したのは9月との事。また、お店の女性は、お一人は大船渡出身で1ヶ月お風呂に入れなかったと話し、もう一人の方は南三陸町出身でやはり大変な目に会ったとの事。でもとても明るく元気で、私が何てこと無く暮らしていた間に、大変な思いをされていた、という事など想像できなかった。災害に会った事によって得たものも沢山あった、と前向きに話されていた事に、何かホッとした。このお店に入って良かった。できれば、観光シーズン前に再び訪ねてみたい、と思う。



12時40分発の代行バスに乗り込んだ。観光バス2台で矢本に向かう。このバスもJRの切符で乗る事ができる。雨が降っていて淋しく何も無い荒野、なのだが、よくよく目を凝らすと、そこには無数の建物の基礎が残されており、元々町があった場所である事に気が付いた。また、バス停の横には変わり果てた駅が、今は何の役目も無くそこに在る。線路はほぼ見えない。「東名」という看板が斜めに立ち、関東育ちの私は一瞬「道路か？」と馬鹿な事を考えた。実は、仙石線の東名の駅があった場所なのである。

そのような景色を何分見続けたらだろうか。少しずつ通常の町の姿が現れ、矢本の駅舎の前でバスは停まった。誘導してくれる方が沢山いる。電車が出るまで時間があるので、駅舎横の地元産直の販売所を覗いてみる。野菜・漬物に混じって、お惣菜やケーキまで売っているし、どれも安い。観光用ではなく、地元の人々の為の販売所のように、気さくな雰囲気嬉しい。

■石巻

矢本から石巻行きの電車に乗る。約15分で石巻に到着。1時間程、石巻の町を歩いてみた。天気が雨のせいなのか、人通りがほとんど無くて、とても淋しい雰囲気だ。よくよく見ると、どの建物も1階のレベルは水に浸かってしまった痕跡がある。とにかく東南方向に向かって歩いていくと町の中に忽然と砂利の広場が現れたり、シャッターがひしゃげた建物が現れたりする。淋しいのは、冬の東北の町に雨が降っているせいだけではない。海辺にたどり着くと、更地が多くなり、建っている建物は津波に痛めつけられ、全く使われていない。雨がひどいので、そのまま、再び駅に向かって歩いていく。

後日、小笠原さんに教えていただいた昭文社の復興支援地図を購入し、帰って来てから眺めていると、私が見たのは海ではなく、北上川で、石巻の平坦な部分は全て浸水している。



↑北上川にかかる橋



←中心街周辺→



水辺の市街



石巻から小牛田に出て一関へ向かう事にする。電車が出るまでの時間、観光物産センターにて買い物をして、早々と出発待ちをしている電車に乗り込み、テイクアウトのコーヒーを購入。寒いので、早くから電車に乗り込み出発を待つ事ができるのは助かるし、このコーヒーの温かさが有難い。電車が走り出すと、あちこちに仮設住宅らしきものが見える。小牛田に着き東北本線を待つ間にすっかり暗くなった。一関で新幹線に乗り換え、盛岡に到着。盛岡の駅は2年前に来た時と、ほぼ変わる事なく、結構賑やかだ。夜は中央に出掛けてちよつと飲む。夜遅くまで人通りが多く、震災の影は感じられない。

## 【2日目 岩手県】

### ■沿岸部へ向かう

朝8時、岩手支部の小笠原さんに迎えに来ていただき、岩手沿岸に向かう。初対面にも関わらず、自家用車で私を乗せて沿岸部を回ってくださる、と申し出ていただき、本当に有難い。

新幹線の走る県内陸部と被災した沿岸部の距離は約100kmだそう。100kmという事は、東海道線ならば東京から熱海まで行ってしまふ。それ程盛岡から沿岸部は離れている。また、ただの100kmではなく、必ず峠超えがあり、また交通手段も関東圏に比べれば格段に少ないので、内陸部からの支援は同じ県内と言えども結構大変なのである。そのような事が現地を訪れて初めてわかった。

### 小笠原氏談

盛岡・花巻あたりは、比較的揺れはひどくなかった。一関の方がひどい。地震に合ったその日は、随分揺れたが、家具が倒れた訳でもなく、2日前の地震と同じような感覚でいた。ただ、数日間停電はしていた。電気が復旧してテレビをつけて、初めて、東北地方の被害の実態を知り、ショックだった。盛岡から沿岸部に支援に行くとしても、丸1日がかかりになり、気軽に行く事は難しい。また、盛岡はそれ程大きな被害は無かったので、盛岡行政も沿岸部の切実さに鈍感であるような印象を受ける。

### ■遠野の仮設住宅へ

今日は晴天になる事を期待して盛岡を出発したが、遠野では雲が低く垂れ込め、霰も時折降る中、遠野市穀町の仮設住宅を訪ねてみた。

たまたま外で話していらした住民の方にお話をうかがう事ができた。

- ・ 入ったのは7月。夏は暑かった。現在は、結露がひどい。
- ・ 集落単位で入居している訳ではない。
- ・ 寒いので反射式ストーブを使用している。
- ・ 一部共用中廊下が設けられ屋根もかかっているが、端の住戸の玄関前は雨等吹込みがひどいので切妻型の屋根の妻面もふさいでくれると助かる。



↑ 一般住戸

↑ 外廊下のある住戸

↑ 中廊下タイプの住戸

敷地内にポストも設置 ↑

東大と県立大で協同で計画し、地元の木材を積極的に使用して地元の大工さんの建てた仮設住宅との事。窓はペアガラス。

### 小笠原氏談

遠野はいちはやく沿岸部支援の体制を整えた。迅速な支援の体制が整った背景には、30年以内に発生すると言われた『宮城沖地震』に対して、10年以上前から、震災に対して様々な対策を考えていた事があると思う。被災直後は自衛隊等の拠点ともなり、多くの人々が入りし、最も活気に溢れていた。

### 私の感想

鄙びた民話の里、というイメージとは異なる優れた防災対策地域である事に感心した。同じ仮設住宅を作るのであれば、やはり、木の手触りの建物の方が、住み手の気持ちも和むのではないかと考えさせられた。共用部分との関係で、魅力的な空間を利用し易い住戸とそうでない住戸の差が気になった。仮設と言えども、共用部分も重要ではないだろうか。

### ■住田町の仮設住宅訪問

遠野から峠をひとつ越え、川沿いに広がる住田町を訪ねた。数箇所の仮設住宅群があるようだが、そのうち最も多数の住戸の建っている仮設群を訪ねた。元小学校の校庭に建てられており、最大の特徴は長屋方式ではなく、戸建て住宅方式だということである。また、再利用にも対応できるとの事。1戸の広さに関しては他の仮設と同様9坪である。



奥の白い建物は校舎



←浄化槽は床置き

住民の方と少しお話できた。

- ・ 結露はひどい。
- ・ 集落で入居している。
- ・ 別の仮設に移った人もいるが、行った先で、希望しても仮設に入れない人がいる中、元々入っていた仮設を出てくるなんて、贅沢、と言われ、辛い思いをしているらしい。
- ・ 2箇所空いているので、見学もできるんじゃないか。
- ・ ペレットストーブが入っている。
- ・ 夫の仕事がこっちだし、流された家は見たくないからこっちで暮らそうと思う。



↑屋根をかけて屋外を有効利用



↑半屋外空間を作った住戸もある



↑干し柿を吊るしている住戸今回見たどの仮設でもこのような風景に出会った

小笠原氏談

木造仮設住宅の建設は、木材産業の振興を進めていた住田町が、被災地の大船渡市や陸前高田市や岩手県の決定を待つことなく、必ず必要となると判断し、独自に行った。あとから公設の仮設住宅として承認を得た。図面はインターネットで公開されている。

私の感想

廃校になった小学校の校庭を利用している、という事は、過疎の地域ということとなろう。そこに、沢山の家族が移住してきており、町としてはかなり今までは違う体制となっている事と思う。しかも、それは独自に動いての事とすれば、その思い切った動きに感心した。戸建てにペレットストーブと設備としては恵まれているが、各々と住戸のつながり方は、遠野の仮設の方が魅力的に思えた。

■釜石

遠野から仙人峠を越え山から下って行くと人家が増え、賑やかな町になってくる。東北の不便な地域にしては、さすが、新日鉄と漁業の町、と思わせる賑やかさがある。天気も大分良くなってきた。しかし、山田線に沿って海に向かううちに、ある地点から先はどの建物も1階が空っぽとなっている。中層の建物が建ち並んではいるが、1階内部は津波の被害に会った痕跡がそのまま残り、ビルの谷間に時々更地が見られる。更地となっているのは、元々は木造の建物があった場所のようだ。漁港に近い地域は建物の2階まで津波の痕跡が見られた。上階は被害が無い、としても、どの建物にも人影は無い。

港へ行ってみる。防波堤の一部が破壊されている。大型貨物船が打ち上げられた所だろうと、小笠原氏。アスファルトの表層が剥ぎ取られた道路の傍に「〇〇商店前」と書かれたバス停がポツンと立っている。バス亭名由来の商店は何も無いだけにとても淋しい光景だ。1年前のこの日は賑やかだったであろう漁港は津波の被害でポロポロになり、人影は全く無い。鉄骨造の建物が多く、仕上げ材が剥ぎ取られた状態で残されている。RC造の5階建ての集合住宅は4・5階を使っている人がいるようだが、1・2階は使用できない。建物の安全性や治安の面以外にも、人の住む空間として、この建物に、住み続けるのは精神的に厳しいように感じた。



←無人の建物に掲げられた赤旗には連絡先が書かれている。



←壊れた防波堤



↑バス亭の新しい木のベンチにホッとさせられる

人気の無い元商店らしき建物とスクラップのようになった自動車



### ■釜石から宮古へ

釜石から北上し宮古へ向かう事とする。宮古方面へ延びる国道への入り口を探して、しばし、行きつ戻りつした。道路地図で目印となっている信号を探していたが、よくわからない。冷静に考えたら流されて無くなってしまっているのだ。釜石からトンネルをくぐって北上すると、程なく両石の集落を通る。集落と言っても、今は何も無い。基礎の立ち上がりだが、そこに家が建っていた事を物語っている。復興が遅れ気味の地域との事。ここから先の道路は集落を通過する時以外はかなり高い位置を通って行く。逆に言えば、海に近い小さな平地に集落が形成されていたと言う事でもある。

両石を過ぎると、テレビと新聞でしか知る事の無かった大槌町が眼下に広がる。何も無い。ほとんど何もないけれど、ある一定のラインから上はそのままの集落が残っている。ポツンポツンと1階が破壊された鉄骨造の建物が建っている事から、ここが町だった事に気が付く。入り組んだリアス式の地形の奥まで津波の被害が入り込み、一方、ほんのちょっと地盤が高かった事でポツンと1軒だけ残っている人家もある。例えば家が無事で住む事が可能であっても、目の前の荒涼とした風景を見ながらでは、以前と同じ日々の生活はとてできないのではないかと感じた。



次に現れた吉里吉里のまちも見渡す限り宅盤だけが続いているような風景だが、真ん中にプレハブ造りのローソンがポツンと建ち、とても賑わっている。ここに来れば日用品は何でもある、という事以上に、とにかく、人が集まれる場所がある、という事に大きな意味があるような気がした。



天気は回復し、目が痛くなるほどの青い海が広がっている。牡蠣の養殖のイカダを見て、小笠原氏が「あ！養殖が再開したんだ！」と喜びの声を上げた。数ヶ月前に来た時には、海上には何も無くとも淋しげだったとの事山田町の道の駅に近いラーメン屋でお昼とする。家族連れが次々に来て賑やかだ。おいなりさんと卵焼きもパック詰めで売られていて、この周辺にとっての日々の生活の気分転換のポイントになっているように感じた。

道の駅を覗くとケヤキ材のスライスが1枚500円・1000円という値段で売られていた。森林組合の催しで、中々魅力的な木製品が手ごろな値段で売られている。ここも、道の駅とは言え、震災後は観光よりも地元の方々の抛り所としての機能が大きいような気がする。コーヒー1杯100円でテーブルでおしゃべりできる場所は貴重ではないだろうか。

ここで宮古民主商工会の木村氏と待ち合わせし、日々の生活の状況をお聞きした。

### 木村氏談

- ・今まで住んでいた場所を嵩上げするか、移転するのか、未だ決まらず、住民は次の動きがとれない。
- ・宮古は地元の大工を使ったリフォームに手当てを出している。それに災害救助法の補助でリフォームができる。
- ・災害後ガソリンも無い時に、地元の建設会社がとにかく車が通れるよう自ら指揮を取り動いた。その後の災害対策はこの活動から派生した。
- ・半年経って奥さんの後追い自殺をした方もいる。いく希望を失わないよう、気をつけなければいけない。

道の駅でお話を聞いた後、仮設住宅に住む方を訪ねる木村氏に同行する事ができた。海に突き出た半島の付け根の山田町の船越集落の仮設住宅を訪ねた。この仮設住宅は、軽量鉄骨造のプレハブ仮設の長屋が連なっているタイプである。遠野や住田で見た仮設に比べるとやはり味気ない。しかし、共用スペースには干し柿や海産物の干物がぶらさがり、ただそれだけで、格段に温かみが増す。

外部に荒巻鮭が吊るされ、植木鉢の植物が一際賑やかな、年配の漁師のご家族の住む仮設を訪ねた。サッシは2重サッシで、外壁に断熱材も新たに施されてはいるが、やはり、むき出しの鉄板の内壁は寒々しい。畳の部屋は、薄い置き畳の床仕上げで、これだけでも冷えの原因になりそうだ。所謂2Kで1間の押入れとトイレ、ユニットバスがついている。ここに、ご夫婦と息子さん一人の3人が暮らしているとの事。

畳の部屋にお邪魔してお話をうかがった。冬が近づき、こたつと反射式ストーブを使用しているとの事。住み手のご夫婦のお話(主に奥様がお話していらした)をお聞きしていると「狭いのもう一部屋借りたいが、中々希望が通らない。ユツタリ暮らしている人もいるのに不公平」とおっしゃっている。震災以外にも、様々な事を抱え、大変そうなのに、奥様はサバサバと話していらっしゃる。そのお姿に敬服。(と書きつつ、実は、方言を聞き取りきれず、お話の内容は何となくわかった、という状態でもあった。)

3人の大人が暮らすにはやはり狭い。持ち物は最小限にしなくては生活するのは難しいと思う。しかし、関東の新興住宅地で育った私には思いもつかないようなものが住居の中にある。まず驚いたのは幅1000以上高さ900位の冷凍庫がドンと置かれている事。もちろん、生活用の冷蔵庫は別にある。それからお仏壇スペースをつくる為に部屋の一面に立派な家具を置いている事、その他に、1間幅の大きな神棚が設けられている事にも目を見張った。お仏壇スペースはお位牌を置く事だけ、と考えたら、もっとコンパクトでも良いだろうし、神棚も、もっと小さくても良いではないか、と思ってしまうところだが、神棚もお仏壇スペースも住み方を決定する中心にあるように感じた。こうして実際に生活の様子を見せていただくと、当然の事ではあるが、住まいは人それぞれ。被災した日から遠くなればなるほど、それぞれの生活の色が空間に反映し、住み手に小さな不満が出てくるという事を目の当たりにした。

今回の災害のような、長期戦での災害対策を考える必要がある時、とにかく雨風をしのぐ事だけが優先された住空間は、個として生きる事を否定しているようにすら思えた。最初に建てる時はとにかく速さが優先されるが、その後、仮設住宅で暮らさざるを得ない人々のために、自分なりの空間をつくっていく余裕は必要無いなどとは誰も言えまい。



↑ 船越の仮設住宅



干物と干し柿 ↑



← 新巻鮭

船越の海のすぐ近くで、牡蠣を食べさせてくれる食堂が新しい建物で営業している。船越集落の一番低い場所には防潮堤が作られているが、津波で半壊している。今日の三陸は海も空もとても青いが、風も物凄く強い。こんなに強い風は滅多に吹かないという。海・空・風全てが関東の町の中では絶対見ることのできないダイナミックな美しさで、こんな自然と向き合って生きてきた人が今もここにいるのだ、と胸が一杯になった。



牡蠣を食べさせてくれるお店 ↑



壊れて引っ張り返った防波堤 ↑

## ■宮古へ

私の知合いから、「学生時代の友人が菱屋酒造の専務だ」と聞いていたので、小笠原さんをお願いし、寄っていただいた。周囲の状況は、元々は港であったであろう、という痕跡だけが残り、菱屋酒造の建物以外は使われている建物はほぼ何も無い状態だ。前の晩に盛岡で菱屋酒造の酒を頼んだが、入荷していない、と断られた。全て流されてしまったんだ、という事が来てみてわかった。しかし、新聞に、新しい設備を整えた、という記事が掲載されたそうだ。新しい復興の灯火のひとつになる事を願う。

菱屋酒造 →



宮古の町を後にすると、太陽は山の端に隠れつつあった。真っ暗な山道を1時間以上走ると、漸く盛岡の町の灯が見えてきた。帰ってきてから知合いが言うには宮古と盛岡の間には信号が一つしかないんだ、との事。確かに暗く淋しい道がこれでもか、と言う位続いていた。小笠原さん、運転をありがとうございました。

## 【最後に】

小笠原さんの構想を実現に近づける活動ができないかと思う。その構想とは、「これからは、森林組合と各土地の大工さんと、全国でネットワークを組んで仮設住宅が必要な場合、迅速に対応する事が必要になってくるのではないかな。仮設住宅が必要な地域へ向けて、日本各地の森林組合が木材を融通し、各地域の大工さんが仮設住宅を建てる。それをコーディネートするのは設計者であり、プレハブ的に施工ができるような仮設住宅のモデルを図面化する、というような事ができないだろうか。」というもの。少なくとも、地元で独立して活動している大工さんが中心になって、いざという時に仮設住宅や災害支援住宅をつくっていく下地づくりは必要なのではないか、という事を神奈川支部でも話していたばかりであらう。少しずつ、構想を具体的なものにしていきたい。

その他、小笠原さんの意見として「職人の手が沢山必要になると思うし、良い職人が東北で育って欲しい。一方で、一定の期間が過ぎたら手が余ってしまう事になるだろう。どうすべきなのか。」という話が度々出た。この問題はこれから深刻になっていきそうだ。

今回、見せていただいたり聞かせていただいた話の中では、被災者に限りなく近い位置にいる人が、行政が動き出すのを待たず、現場を見て、いち早く、的確に動いた事が実を結んでいるパターンが実に多いように感じた。そ  
一方、関東でのほほんと過している私は何ができるだろうか？関東でも災害が起きる可能性は大きい訳で、東北で得た教訓を無駄にせず、いざとなったら動けるような下地作りをしなくてはいけない、というのがまずは一つ。さらに、バーゲンセールで華やかな横浜の繁華街を歩きながら、この空気とは全く違うであろう状況の中で生活している人々が沢山いる訳で、何が出来るか、常に意識して過さないと自分自身に引き付けて考え続けられないと改めて戒めた。

行ってきてから、もう2ヶ月近くが経つ今、新聞を眺めていると、毎日少しずつ被災地のニュースが掲載されている。私が見落としてきた事が報道されている場合も多々あるし、新しい動きが始まったという報道もある。再度、今度こそ具体的な支援をしつつ、しっかり目を見開いて被災地を見たいと思う。

最後になりましたが岩手では小笠原さんにお世話になりっ放しでした。岩手県内は、小笠原さんにとっては地元だからよくご存知だろう、とボーっと助手席に乗っていましたが、よく考えたら、100km離れた土地では、小笠原さんも旅行者である私と同じ立場である事に途中で気が付く始末。もっと下調べやナビゲーター等働かなくてはいけない、という事に大分経ってから気が付く始末で、本当に申し訳ありませんでした。1人で訪ねたら何も見ないで帰って来たかもしれないところを、大変有意義な時間にしていただき、本当にありがとうございました。